

幅広き道

札幌の幅広き道に在りし日の啄木需めし焼き玉蜀黍

弁慶

連れ立ちて光りの中を昼休み北の大路は春遠からじ

蘇生

ひととせの見納めと見し花の径ゆくりなくよれば花は雲めく

しゅう

春更けてうつろふ日々には山々のかもす色香は類なきもの

蘇生

春の山を山笑うなど我にはみどり児の泣く声の湧きくる

しゅう

見渡せば三方の山に桜咲き遠く遙かに見ゆる島かげ

弁慶

島影の遠き浜辺で幼子が手に持つパンを鳶が襲いし

蘇生

時死すかに三浦半島のキャベツ畑鳶現れて輪を描き消ゆる

しゅう

山がつの身なれど今は居住まひを正して恋の想ひ告げなむ

冬扇

鶏が鳴く吾妻の国の真間の村手古奈の恋は悲しかりけり

弁慶

更科の矢切に立ちて偲ぶれば真間の手児名の伝え悲しも

蘇生

青春の我が恋思い出だすとき夜汽車が軋む骨の中から

しゅう

北へ行く夜更けの汽車が止りたる小さな駅よ「夜ノ森」の駅

詠人知らず

ふるさとへ向かふ心の高鳴りをゆるり軋らす単線二輛

寂

窓あけて駅弁頼むと思ひしが「かねがさき」の駅の名とどろく

弁慶

東京へ帰れる日あり窓開けて母と笑へり煤煙の顔

海月

ふるさとへ行く列車かも夜の汽笛聞きつつ児らを寝かす社宅に

しゅう

空はいま何色なのだ晴れなのか土砂降りなのか日本は晴れだ

海月

ははそぎの芽吹き初めし里山に白く散る散る山桜かな

弁慶

しづかにて四方から花がとめどなく地をもわれをもおほふばかりに

蘇生

散る花のしろき骨片と見えしらしライ療養所の歌にありけり

しゅう

地を染めし花びら白き布の如し桜の下に埋ましものは

蘇生

里山を遠く見るとき山桜あそこにここに目が探しをり

しゅう

橋姫の裳裾をひたす宇治川に山桜散る風なき日かな

弁慶

山並みは霞か雲かふじざくら彼岸の人を訪いし道行

寂

梅盛り相合駕籠の道行けば新口村に雪の降りつつ

冬扇

降る雪に紛ひし白き花びらの間を白き蝶が舞ひ立つ

蘇生

こでまりの花咲く細き野辺の道まぶた閉じれば母の面影

弁慶

カラタチは思い出の花白花の小さき垣根に二つ三つ見ゆ

しゅう

カラタチの垣根潜りて逢いし人黒き鬢にも白きもの見ゆ

弁慶

廃屋になりて久しき生垣の貝塚息吹盛んなるかな

蘇生

廃屋と見えしが業者の手が入りて若き夫婦住むランドクルーザー

しゅう

廃屋の点々とする山村に今年も新緑湧くがごとくに

弁慶

育ち過ぐ貝塚伊吹刈込みる春日点々ねこの墓にも

海月

建立の赤文字すでにかすれ来し墓の草抜く春の陽だまり

蘇生

リユーマチの病の重き友縁の陽だまりに座して土筆愛しむ

しゅう

にいさまの癒え始めたるそのお声抱きて辞せば春の満月

寂

大潮の春の干潟を喩ふればもろ肌脱ぎし女人の如し

蘇生

晩春の池面は黒く蠢きておたまじゃくしの王国と成す

しゅう

黒々と上目使いに影をみて散りて集きぬおたまじゃくしは

蘇生

心あらば今をながめよと詠ひける心敬偲ぶ伊勢原の里

真奈

つらね歌詠むはワグナー聴くに似て此岸彼岸とめくるめくなり

ばばな

巨きものたうつ如く吹き抜ける春の嵐は浅緑色ぞ

蘇生

裏山に鳴く鶯の声いつか深みを帯びて春惜しむらん

海斗

刺繡糸生地にのせ色を合わせぬうぐいすのつやつや啼くを聞きつつ

しゅう

紅梅の葉先のすでに緑にもかすかな紅が色に残りて

蘇生

すきとほる緑のなかにきらめける命あるらし柿若葉萌ゆ

海斗

見晴るかす高みにたてば方々の畑打ち見ゆる河岸段丘

蘇生

茶摘女となりて祖母居て母と居て昨日のごときかの日かの丘

寂

晴れだから肩肘張った夕口がゆく紫雲英咲く丘夕口がゆくゆく

海月

春を訪うバスは盛りの里を経てやがて春めく九十九折へと

蘇生

つれなきを知りつつ今日も言問へば墨田の川の都鳥かな

冬扇

道昏れしライの人寄る身延山深敬園を訪えば急く瀬音

しゅう

我が妻のふるさと身延の山の中共に登りし女坂かな

弁慶

高みへは二つの道のいづれかと問はれゆるりとをんな坂ゆく

蘇生

忠孝の狭間に死にし逆縁の子を偲び泣く哀れ相国

冬扇

大義なる言葉あまた飛び交いて知らず知らずに朱子学の道

弁慶

葉隠れにさくらんばの色付く或る日あまた鳥群れ爆竹のごとく

しゅう

小手鞠の盛りて風にふれ落ちぬ白き花びら米粒に似て

蘇生

一枚の純真として水芭蕉水の脈きく耳を澄まして

ばぼな

白白と水芭蕉咲く辺には木々の新芽が淡く点れり

蘇生

楠青葉風吹き渡る鞠子宿宗長縁の柴屋寺を訪う

弁慶

借景の鞠子の富士は花霞宗長月見の柴屋の石

真奈

丸子なる鞠子の宿は惜春の菜の花散りて青梅たわわに

蘇生

とろろ汁鞠子の宿の西隣昔男の鳶の細道

弁慶

まわり道父につれられ鞠子宿遥か反照遥か駿河よ

寂

藁科や枕草子の木枯しの森ぞ今こそ青若葉して

弁慶

枝垂れ咲く藤の花よりあてなるは苺食ひをる美しき稚児 冬扇

新しきランドセル背に睦み合う次代の子らに幸多かれと

蘇生

杜若たあまたさぶらいたまいける勅願の寺の池の汀に

弁慶

しなやかなから衣なる京菓子に出づる思ひは杜若かな

蘇生

杜若姉の忌なれば酒すこし仇な客気の懐かしきかな

真奈

杜若きつつなれにしジパンの綻び繕う妻にしあるかな 弁慶

トシャツによれたジパンスニーカーの輝くような若き一団

蘇生

眩しすぎる五月の並木 吾とともに住むか住まぬか迷へる母に

たまこ

原宿の櫻並木は緩やかな坂なしており青山への道

弁慶

イラクにて散りし男の青山の勇ましきこと哀しきことよ

蘇生

人間に青山在りと人の云ふ雨が撃つだけ砂になるだけ

海月

目覚めよきひんやりとした東雲の今はぬくもり雨が匂ひて 蘇生

霞切りの声せわしくも花水の流れゆるやか虹ヶ浜へと 詠人知らず

小磯なる鴨立つ沢を過ぎゆけば一号線は松並木道 蘇生

西行の通り歩みし野辺の細道を鎌倉古道と今人は呼ぶ 弁慶

行き先は斑猫まかせ草いきれの青き香のたつ細道を行く たまこ

旧道の軒をかすめる細道を主に牽かれし犬はとりどり 蘇生

古えの歌びと歩みし細き道つゆにぬれつつ三嶋宿へと 弁慶

恋ひそめて恋の意味をも知らで泣くさなる乙女の日々もありけり 冬扇

「短時間でも会いたいです」と書いてある林檎ほのかにほへる卓に たまこ

十代は風月堂今は喫茶室滝沢新宿駅中央口 しゅう

ウィンナコーヒーですなああなたのお気に入り蛍の野辺の夜を話そう 海斗

風月の朝コーヒーに昼りんご日活名画座バルドーの夏 海月

新宿の伊勢丹会館芸路なる瀬戸内産の牡蠣の美味しき 詠人知らず

生牡蠣に地の酒あれば瀬戸内も北のどこぞも無双なりけり 蘇生

暫くは梅雨鱧召せよ我が友よ時の至れば地の酒と牡蠣 弁慶

真つ白き鱧に紅なる梅肉をけだし今年の梅雨も来にけり 蘇生

「真つ白き鱧に紅なる梅肉」の言の葉だけで我は満足 弁慶

大皿にそぎ並べたる薄造り夏のおこぜは無双なりけり 蘇生

風貌は醜くくあれど唐揚げの美味しを知れば虎魚いとしき 弁慶

いにしへは海の魚なり陸封魚岩魚は遠き潮鳴りを恋ふ たまこ

我が友の頻りに恋うは松青き紅き蹴出しの塩屋の岬

弁慶

桃李和歌連作百首歌集

第五六〇一首より五七〇〇首迄

平成一六年四月五日より平成一六年六月十二日